

《正岡子規 (36) の続き》その305

天涯茫茫

下村為山の続き

ここにかかげた為山の署名群は、渥美氏の『探究・下村為山』に載るところである。書家ではない小生には、落款や署名の字体の変化について詳しく書き述べることはできない。年代順にあらわされているので、専門家によれば表現の微細な変化にそれぞれの意味があるであろう。

先述したように、為山は中林梧竹に私淑した。梧竹は幕末・明治の書家として有名であった。文政10—大正2年（一八二七—一九一三）。肥前小城おぎの人。19歳で江戸に出て、山内香雪、市河米庵に書を学ぶ。明治15（一八八三）、同30年の二度、清国に渡り、滞留前後十四年、深く書法を研究し、書家として名を成した。漢・魏・六朝の碑の拓本を多くもたらしたことも有名である。

為山は梧竹に直接、書を学んだのではないであろうが、その字体に学び自家のものとしたのである。ここに掲げた署名は梧竹の書風を模したものと思われる。

渥美氏の著書に載る為山の署名は、年代が順不同なので、判りやすく並べ変えてみた。年代は次の如くである。

	邦 曆	西 曆	干 支
(1)	明治44年	(一九一一)	辛亥
(2)	大正5年	(一九一六)	丙辰
(3)	8年	(一九一九)	己未
(4)	昭和4年	(一九二九)	己巳
(5)	12年	(一九三七)	丁丑
(6)	17年	(一九四二)	壬午

ほぼ30年にわたる署名の字体の変遷を辿ることが出来るだろう。昭和12年は多作なのか、多くの署名が集められている。為山はまた図案にも興味を持っていた。各種の雑誌その他を飾った。図は雑誌「ホトトギス」の表紙である。図案の直線、曲線についても論じている。

(1) 明治四十四年（一九一一年）

為山 字

大正五年

為山人守

(2) 大正五年（一九一六年）

為山自題

為山書

為山書

為山人守

(3) 大正八年（一九一九年）

大正己未仲著

為山守

為山人守

(4) 昭和四年（一九二九年）

己巳夏

為山書

(5) 昭和十二年（一九三七年）

丁丑秋日始留學

洞中為山書

為山作

為山逸士書

為山書

昭和丁丑秋日

為山書

為山書

為山書

為山書

為山逸士

(6) 昭和十七年（一九四二年）

壬午歲首

為山書



「ホトトギス」7巻8号
明治37年5月10日刊。